

奥羽の鷹使い、日本の狩猟習俗

1985
作品ナンバー0246

文部省選定 科学技術庁推奨 〔推薦〕日本映画ペンクラブ 優秀映画鑑賞会 1985年教育映画祭優秀作品賞 1985年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第6位

映画は、絶滅寸前にある伝統習俗の鷹使いの実際を記録した貴重な民俗資料である。同じ伝承でも、伝統工芸などとは異なり、生きものを対象とした伝統狩猟の詳細を映像化した作品である。



クマタカは、イヌワシにつぐ大型の猛禽である。この野生のクマタカを飼い慣らして、狩猟に使う技術が、雪国の奥羽地方に伝えられてきた。現在、タカ狩りの技術を持つ者は、山形県の朝日村に住む松原英俊さん（35歳）と、秋田県羽後町に住む武田宇市郎さん（70歳）等である。松原さんは10年前、山形の真室川町で今は亡き杓沢朝治さんからタカ狩りの技術を学んだ。最近では野生のクマタカも獲物のウサギもめっきり少なくなり、鷹使いで生計を立てていくことは難しい。鷹使いは、いわゆる鷹匠とは一線を画し、いわば生業の一手段としてなされて、娯楽やゲームとして狩猟する者とは性格を異にした。

かつて、鷹使いは、本格的な猟期を目前にする年の初めの小正月には、立木にノサ掛けして山の神に豊猟を祈願し、身のけがれを清めて本番に臨んだ。編み笠を被り、サシコの着物をきた上に背当てをつけ、雪袴をはいてハバキをつけ、かかとにアクトカケを当て、ツマゴワラジを履く。新雪の深いときはカンジキをつけた。こうした装いで獲物を求め、山歩きをすることは並大抵ではない。厳しい自然条件のもとで生きぬいてきた人々の間に伝えられてきた鷹使いの猟法。人々は自然の恵みを大切に、恵みをもたらす山の神に感謝の気持ちを忘れずにきた。そうして自然との調和が保たれた。

タカ狩りは、冬の季節の前に、狩りのための厳しいタカの調整と訓練から始まる。この貴重な狩猟習俗を後世に伝えたいと松原さんは獲物を求めて、厳しい冬山に挑んでいく。

記録
35ミリ
カラー／33分

- 企画
国立歴史民俗博物館
- 協力
文化庁

スタッフ

- 製作
村山和雄
- 脚本・演出
村山正実
- 撮影
山崎堯也
- 照明
浅見良二
- 音楽
長沢勝俊
- 解説
内藤武敏

